ジョン・コレットとヒューマニズム

大川　なつか

はじめに

ジョン・コレット (John Colet, 1467-1519) は、イギリス・テューダー初期に活躍したヒューマニストである。聖パウロ司教座教会首席司祭 (Dean of St Paul's Cathedral Church) だった彼は、改革派の聖職者として知られ、また聖パウロ学校 (St Paul's School) を設立した教育実践家でもあった。

イギリスにおけるイタリア・ルネサンスの影響は、ヘンリー5世の弟にあたるグロセスター公が、プラトン、アリストテレス、プルタルコス、そして教父などのギリシャの古典作品を収集していたように、既に15世紀より認められる [1]。15世紀半ばになると、ギリシャ研究への一層の関心と共にその価値が知れわたるところとなり、15世紀末にはケンブリッジ大学に「新修辞学 (*Nova rhetorica*)」といった講座が設けられるようになった。

しかし16世紀に入り、ウィリアム・グロシン、トマス・リナカー、コレットといったオックスフォード・サークルと言われる一群の活躍によって、イギリス・ヒューマニズムは本格的な幕を開けたと言える。彼らが作り上げたイギリス・ルネサンス初期の様相は、とりわけフィレンツェからの影響による新プラトン主義を骨子としたものであり [2]、フィレンツェ・サークルの宗教的気風を受け継いだ彼らの多くは、「源泉へ (*ad fontes*)」というモットーの下で宗教的、倫理的諸問題に強い関心をもって聖なる著作にまで研究の対象を広げ、キリスト教の根源の解明とその解釈に力を注いだ [3]。かくしてイギリス・ヒューマニズムの思想的系譜がはっきりとした形で辿れるようになったのは16世紀以降のことであり、オックスフォードでパウロ書簡に関する講義を行ったコレットは、その系譜の始まりに位置する。

コレットは、自らのヒューマニズムの精神を聖書研究のみならず教育においても発揮した。聖パウロ司教座教会には古くから文法学校が存在していたのだが、彼の設立した聖パウロ学校は、既存の教会附属の文法学校とは学校運営権、教育目標、教育内容、教育方法など様々な点で異なっており、イギリス教育史上、後続するヒューマニズムの学校の雛形となった [4]。その教室には、コ

[1] Robert Weiss, *Humanism in England During the Fifteenth Century*, Basil Blackwell, 1941.

[2] ダグラス・ブッシュ、赤川裕・大場建治訳『ルネッサンスとイギリス・ヒューマニズム』南雲堂、1966年. また、Douglas Bush, *The Renaissance and English Humanism*, Univ. of Toronto Press, 1939.

[3] エルンスト・カッシーラー、花田圭介監修、三井礼子訳『英国のプラトン・ルネサンス』工作舎、1993年、p.33. また、Ernst Cassirer, *The Platonic Renaissnace in England*, Univ. of Texas Press, 1953.

[4] Joan Simon, *Education and Society in Tudor England*, Cambridge at the Univ. Press, 1967, p.80.

レットの求めに応じてデシデリウス・エラスムスが書いた次のような詩が掲げられている。「この若き者たちは、あたかも新しい煉瓦のようにギリシャとラテンの両作品、そして聖なる信仰とキリストとを、幼い子どもの内から生涯にわたって吸収します」[5]。このように古典語を通じて新たな宗教教育を目指した聖パウロ学校には、コレットを敬愛して止まなかったトマス・モアも自身の息子を通わせている。

本稿の目的は、イギリス・ルネサンスの思想的起点に位置するコレットにおけるヒューマニズムとは一体どのようなものであったのかについて明らかにすることである。これまでもコレットのヒューマニズムに関する研究は多くなされてきたが、とりわけ彼の思想的特質とも言える神秘的傾向をもった新プラトン主義と聖パウロ学校での教育とを密接に関連付けて論じたものは管見の限りほとんどない[6]。そこでコレットのヒューマニズムを一層明らかにする手がかりとして、新しい聖書研究にみる彼の思想的特質とそれに依って立つところの聖パウロ学校での教育実践とに着目して考察を行っていく。

1. ジョン・コレットの生涯

まず、コレットの生涯について概観しておこう[7]。1467 年、コレットはロンドンの裕福な家庭

---

[5] *'Haec rudis(tanquam nova testa),pubes Literas Graias simul et Latinas, Et fidem sacram tenerisque CHRISTUM Conbibet annis.* ' Cf., Michael F.J.McDonnell, *A History of St.Paul's School*, Chapman and Hall, 1909, p.46. なお、この学校で実際にギリシャ語が教えられたかどうかという点については懐疑的な見方が多い。しかし、中等教育段階でギリシャ語教育の必要性を学校規則の中で明確に示したという点では革新的であったと評価されている。

[6] 例えば代表的なコレット研究書には、J.H. Lupton, *A Life of John Colet, D.D.,Dean of St.Paul's, and Founder of St.Paul's School*, Burt Franklin,1974(1887). Frederic Seebohm, *The Oxford Reformers : John Colet, Erasmus, and Thomas More*, AMS Press,1913. John B.Gleason, *John Colet*, Univ.of California Press, 1989, などが挙げられるも、新プラトン主義が与えたコレットの教育観への影響についての言及はいずれも不十分である。なお我が国では、齋藤新治『中世イングランドの基金立文法学校成立史』亜紀書房、1997 年、があるものの、これは基金立文法学校という学校史から聖パウロ学校を扱っており、コレットの思想的側面から論じているものではない。

[7] コレットの生涯について最初に伝えたのは同時代人のエラスムスである。彼は、コレットが没した2 年後の1521 年、ルターと近しいヴィッテンベルグ大学のヨーナスに書簡を宛て、カトリック信者として生きたコレットの敬虔さを伝えるという意図をもってその生涯を記している。Cf., Desiderius Erasmus, translated by R.A.B. Mynors, and annotated by Peter G. Bietenholz, *Collected Works of Erasmus*, Vol. 8(letter no.1211), Univ. of Toronto Press, 1988.(以下、CWE と略する) その後、コレットのプロテスタント的側面から叙述したものにジョン・フォックスのものがある。Cf., John Foxe, ' Doctor John Colet, Dean of St. Paul's, ' in printed by J. Daye, *The Eccesiasticall History, Conteynyng the Actes and Monumentes of Martyrs*, Vol.II, book VII, London, 1570, pp.964-965. 更に、アングリカン・チャーチの礎を準備した聖職者として描き出したものには、19 世紀に出されたナイトやルプトンのものがある。聖パウロ学校関係者である彼らは、「創設者」コレットの革

に22人兄弟姉妹の長男として生まれた。彼の父親は、大カンパニーの一つである絹織物組合(Mercers' Company)の幹部であり、またロンドン市長を2度も務めた実力者であった。コレットは地元の文法学校を卒業後、1483年頃ケンブリッジ大学に進学し、B.AとM.Aを取得したとされる[8]。エラスムスはこの時のコレットの様子を次のように述べている[9]。「コレットはスコラ哲学の知識を完璧に修得し、自由七科において熟達を示す学位を授与されました。実際、彼はそれら全てに関して精力的に学び、成果を収めたのです。というのも彼は、キケロの作品を貪欲に読み、細心の注意を払ってプラトンやプロティノスの作品を熟読し、数学のあらゆる領域に手を付けました。その後あたかも価値ある品を探し求める商人のように、フランス、そしてイタリアへと旅立ったのです。」

1492年から1496年頃まで、コレットはパリ、オルレアン、ローマといったヨーロッパ大陸を巡遊する。とりわけイタリアでの足取りについては、1492年9月から1493年の5月まで、ローマに滞在していたことが分かっている[10]。またフィレンツェに滞在したかどうかについては明らかな証拠がないため従来では懐疑的な見方がなされていたが、近年の研究ではおそらくここに立寄り、更にはイギリス帰国前のこの頃からマルシリオ・フィチーノと書簡を交わし始めていたであろうとされている[11]。いずれにせよ、コレットは新プラトン主義の思想的影響を強く受け、パ

新的な教育実践を行ったヒューマニストとして高く評価した。Cf., Samuel Knight, *The Life of Dr.John Colet, Dean of St.Paul's in the Reigns of K.Henry VII. and K.HenryVIII. and Founder of St.Paul's School*, Oxford at the Clarendon Press, 1823.J.H.Lupton, *op. cit.* このようなヴィクトリア時代のコレット像を修正する形で出されたのが、グリーソンの研究である。ここでは原始キリスト教会への回帰を求めたカトリック聖職者としてのコレット像が打ち出され、またそれまで言われてきた革新的ヒューマニストとしての側面さえも弱められている。Cf., John B.Gleason, op.cit. 最近では、カトリックかプロテスタントかといった枠では捉えられない、Church Perfection を目指したコレット像を描き出したアートルドの研究がある。Cf., Jonathan Arnold, *Dean John Colet of St Paul's, Humanism and Reform in Early Tudor England*, I.B.Tauris, 2007.

8 1464年から1504年までのオックスフォードの人名記録が現存していないため、コレットがオックスフォードで学んだのかは分かっていない。しかしトラップによれば、ポリドールはコレットがオックスフォード及びケンブリッジの両方で学んだと記述していると述べている。Cf., J.B.Trapp, 'John Colet,' in Peter G.Bietenholz and Thomas B.Deutscher(ed.), *Contemporaries of Erasmus A Biographical Register of the Renaissance and Reformation*, Vol.1, Toronto, 1985, p.324. (以下、J.B.Trapp, *Contemporaries* と略す)

9 *CWE*, Vol.8, p.233. コレットは、パウロ書簡の講義では僅かにギリシャ語を使用しているもほとんど理解できず、大学当時に読んだとされるこれらの著作もラテン語で読んでいる。生涯このことを悔い、聖パウロ学校の１期生でモアの家に住んでいたジョン・クレメンツの助けを借りて出来ることならギリシャ語を習得したいと晩年まで願っていた。

10 J.B. Gleason, *op.cit.*, p.45. ローマでコレットが宿泊していた「宿泊所(English Hispice)」には、時期を別にしてトマス・リナカー、後のカンタベリー大主教ウィリアム・ワーハム、グロシンの名付け子で聖パウロ学校初代校長ウィリアム・リリー、後のヨーク大主教クリストファー・ベインブリッジらも利用していた。

11 現存する3通のフィチーノとコレットとの往復書簡は、フィチーノの『書簡集(*Epistolae*)』(1495) には収められていない。オックスフォードでこれらを見つけ出したジェインによれば、往復書簡はコレットの帰国後に開

ウロといった聖なる著述家について学びイギリスに帰ってきたのである[12]。

1497年、神学に関する学位を持っていないにも拘らず、オックスフォードにてパウロ書簡に関する聖書解釈講義を開始する。そこでは、従来の大学のやり方にとらわれない「公開且つ無報酬 (*publice et gratis*)」の形が採られた。講義は、以後6年余り続けられたが「中世後期のスコラ神学の伝統を打ち破る」[13]スタイルは、エラスムスをはじめとする当時の知識人に衝撃を与え、1504年にはオックスフォードからD.Dが授与される。彼の評判を耳にしたヘンリー7世は、翌1505年に聖パウロ司教座教会の首席司祭としてコレットを任命した。

オックスフォードからロンドンへと活動の拠点を移したコレットは、パウロを通じて自ら導き出したキリストの教えを礎に、質素かつ禁欲的な生活を実践し諸々の改革に着手する。教会改革の中で最も有名なものに、1512年にカンタベリーで行われた高位聖職者会議開会式での説教がある[14]。またウルジー枢機卿就任式での演説[15]や新たな聖パウロ司教座教会会則の作成なども挙げられよう。堕落した聖職者の生活を戒め、原始キリスト教会の姿へと戻そうとするコレットの活動は、旧態然の聖職者らとの軋轢を生み、異端の廉で訴えられるなどしたが、最終的にはカンタベリー大司教によって取り下げされる。また王室からの信頼も厚く、ヘンリー8世の宮廷付き説教師や国王の諮問機関の宗教委員なども務めた。他方で、エラスムスが行ったギリシャ語版新約聖書校訂のための諸資料を提供したり、コレットの実母の邸宅に滞在していたヘンリクス・コルネリウス・アグリッパと共にパウロ書簡の研究を行ったりするなどヒューマニストらと親交を深めていった[16]。

コレットは信仰の立て直しを、大人には説教、子どもには教育を通して図ろうとした。1505年に父親が亡くなった時、兄弟姉妹の中で唯一生き残っていた彼は、受け継いだ遺産を基金とし

始されたとされる。Cf., Sears Jayne , *John Colet and Marsilio Ficino*, Oxford Univ. Press, 1963, pp.81-83. しかし、グリーソンは書簡の日付けが確かな検証もなしにジェインによって付されたもので、実際にはコレットがイタリアにいる時、しかもフィチーノの住居からそう遠くない場所から発信されていたであろうと反論し、また書簡の順序さえも誤っていると指摘している。Cf.Gleason, *op.cit.*, pp.47-52. いずれにせよ、コレットがフィチーノと思想的交流をもち、多大な影響を受けてオックスフォードでの聖書解釈を行ったという点には変わらない。

12 コレットは偽ディオニュシオスの『天上位階論(*Celestial Hierarchy*)』や『教会位階論(*Ecclesiastical Hierarchy*)』の要約なども手がけている。その時期については分かっていないが、グリーソンによれば、従来の説で言われていたオックフォード時代ではなく、ロンドンに移ってからの1512年から1516年までと推論しているCf., J.B.Gleason, *op.cit.*, p.92.

13 P.Albert Duhamel, The Oxford Lectures of John Colet:An Essay in Defining the English Renaissance, *Journal of the History of Ideas*, Vol.14. No.4(Oct., 1953),p.493f.

14 この説教内容は、唯一コレットが生きている間に公刊されたものであり、現在では邦訳も出されている。八代崇、中村茂、金子啓一、井田泉、戸村潔訳『宗教改革著作集 11— イングランド宗教改革 I』教文館、1984年.

15 J.H.Lupton, *op.cit.*, pp.193-198.

16 J.B.Trapp, *Contemporaries*, p.327.

て聖パウロ学校の設立に充て、当時の文法学校には珍しく無償性とすることによって、広く門戸を開いた公共性の高い宗教教育を実現させた[17]。学校の運営は、堕落の少ない団体であるとの理由から教会の参事会ではなく俗人の団体である絹織物組合に託し、学校規則を作成し、初代校長を直接指名するなど教育改革にも着手したのである。教育内容に関しても同様に、英語による初級ラテン語文法書や同じく英語によるカテキズムを書き、中級及び上級ラテン語文法書は初代校長のウィリアム・リリーに、修辞用教材はエラスムスに依頼した[18]。このため彼の学校は、保守的な聖職者らによって「異端の館 (a house of idolatry)」だと批判され、その執拗なまでの攻撃に一時期は修道院に隠居することも考えた程だったが、最後まで改革の手を緩めることはしなかった。しかし学問改革、教会改革、教育改革に生涯を捧げたコレットは、1519 年当時流行していた粟流熱にかかり 52 歳でこの世を去る。現在その亡骸は、聖パウロ司教座教会内に埋葬されている。

2. オックスフォードにおけるパウロ書簡に関する聖書解釈講義

（1）霊的解釈方法

オックスフォードでの聖書解釈講義では、パウロ書簡の「ローマの信徒への手紙 (*Enarratio in Epistolam P. Pauli ad Romanos*)」と「コリントの信徒への手紙 1(*Enarratio in Epistolam Primam S. Pauli ad Corinthios*)」が取り上げられた[19]。P.O. クリステラーが「パウロ書簡をスコラ神学の背景と体系によらず解釈しようとする試みがフィチーノ、コレット、エラスムスのような学者によって行われた」[20] と述べていたように、この講義ではフィチーノ、偽ディオニュシオスからの引用が少なからずなされるも、権威ある註解書に依拠することは極力さけられた。コレットの講義を聞いたエラスムスは「コレットの話を来ている時、あたかもプラトン自身から話を聞いているかのように私には思われる」[21] と伝えている。

コレットの講解は、本来キリストの言葉は難解なものではなく平易なものであったはずとの思

---

[17] 設立年については、校舎が完成した時、本格的に授業が開始された時など、1508 年から1512 年まで諸説幅があるものの、現在まで存続する聖パウロ学校のホームページでは1509 年となっている。

[18] 学校用テキストは、『編纂(*aeditio*)』として編集され、現存する最古のものは1527 年版のものである。John Colet, *Aeditio*, in Alston, R.C.A. (ed.), *English Linguistics; 1500-1800*, A Collection Facsimile Reprints, No.298, Scolar Press, 1971(1527).

[19] John Colet, *An Exposition of St. Paul's Epistle to the Romans*, in J.H. Lupton(ed.), *Opera*, -Vol.1,Gregg Press,1965(1873). John Colet, *An Exposition of St. Paul's First Epistle to the Corinthians*, in J.H. Lupton(ed.), *Opera*,Vol.2, Gregg Press,1965(1874). (以下John Colet, *Opera* と略す)

[20] P.O. クリステラー、渡辺守道訳『ルネサンスの思想』東京大学出版会、1977 年、p.111.

[21] *CWE*, Vol.1, p.235. マイルスによれば、コレットはパウロにおいて特徴的だったspirit やflesh というヘブライ的用語よりも、プラトンが使用したsoul やbody といったギリシャ的用語を好んで用いていたとする。Cf.,Leland Miles, *John Colet and the Platonic Tradition*, Open Court Publishing, 1961, p.86f.

いから、読み手にとって一層理解しやすいようにと工夫され[22]、また「パウロの言っている事に対するいかなる注釈をも取り上げる前に、パウロの言った事そのものに対してまず注意深く当たらなければならない」[23]との原典主義の立場をもって、聖書に書かれてある文脈に即し精読するというヒューマニズム的手法がみられた。それは、ロレンツォ・ヴァッラやエラスムス同様、予備的作業としての原語による正確な原典の確立と正確な翻訳といった言語に関わる緻密な研究、字義的・歴史的解釈を大前提とする[24]。そこでは聖書を断片的にみていくのではなく、キリストの教えを記した一つの書物として捉えられ、文脈上の関係性に留意しながら、それぞれの聖句の持つ意味を注意深く解釈する作業が必須となっていた。なおその上にコレットにあっては、神との霊的合一によって、言葉の背後にあるキリストの教えを導き出し、読み解こうとする態度が見られた。聖書の意味するところは統一した一つのものであるという考えの下に、正確な言葉の検討作業は神の教えを伝えるためになされるべきではあるものの、さらに進んで神秘的・霊的解釈が重んじられたのである。

コレットの講義は、「神の存在や力の証明はどこにでもある」という論旨から出発する[25]。神の啓示は万物の至る所にあるとの考えから始まり、そうした神性が宿る万物の一つに聖書を位置付け、また聖書に示される啓示・神の真意とは、神的実在 (devine realities) であり、解釈上の歪曲や誤解から守られるために、一見すると見えない、隠された状態にあると捉える。「パウロやディオニュシオスは、聖霊に依らない人間の言葉が、神の啓示と混同されることを良しとはしていませんでした」[26]と述べるなど、言葉の背後に隠された神の啓示は、霊的な人間のみが捉える事が可能であるとする。「聞く耳」と「見える目」をもつ者のことを語ったイエスの話は、コレットが好んで引用した教え (『マルコによる福音書』4:10) だった[27]。神の啓示とは、単に耳や目があっても聞けない、見えないものなのである。神を知識の対象にせず、信仰の対象とするコレットは「真実は神の恩寵によって理解され、神の恩寵は祈りによってもたらされ、そして祈りは、瞑想や断食によってかなえられ、他の方法に頼ることは妄想にすぎない」[28]とする。

コレットの求める聖書解釈には、禁欲的信仰生活の内にある祈りと共に霊的な導きが欠かせなかった。神の言葉を如何に把握するのかという点について、「言葉の説明を事細かにするのは文

---

22 John Colet, *Opera*, Vol.2, p.159.

23 Kenneth Charlton,*Education in Renaissance England*, Routledge and Kegan Paul;Univ.of Toronto Press, 1965, p.58.

24 木ノ脇悦郎「16 世紀人文主義者たちの聖書解釈」(出村彰・宮谷宣史編『聖書解釈の歴史— 新約聖書から宗教改革まで』日本基督教団出版局、1986 年、所収) pp.279-310.

25 John B.Gleason, *op.cit.*, p.148.

26 John Colet, *Opera*, Vol.2., p.18f.

27 John B.Gleason, *op.cit.*, p.158.

28 John Colet, *Opera*, Vol. 2, p.110f.

法家の仕事で、真の聖書解釈者の仕事ではない」[29] と捉え、1) 字義的な判断 (literal sense)、或は語源的判断 (etymological sense) で行う解釈、2）寓意的な判断 (allegorical sense) で行う解釈、3）道徳的な判断 (moral sense)、或は比喩的な判断 (tropological sense) で行う解釈、4）神秘的な判断 (anagogical sense) を取り入れながらも、とりわけ神秘的･霊的解釈を重視した[30]。このように、彼の聖書解釈方法には新プラトン的思想の影響がみてとれ[31]、彼のヒューマニズムの特徴を方向付ける一つの大きな要素となったのである。

（2）あるべき人間の姿

「生の改革と刷新をもたらさんとした」[32] コレットの講義では、パウロ書簡を通してイエス･キリストの姿が生き生きと蘇生され、教義上の問題というよりは、むしろ人々の日々の生き方、キリスト者としての日常のあるべき姿といった道徳的な教えが示された。以下、パウロが「信仰、希望、愛」のうち最も大いなるものは愛であるとした「コリントの信徒への手紙　1」(13 章) を中心にコレットの求めた人間の在り方についてみてみる。

「愛は、私たちを完成へと燃え上がらせるのです。完成するということは、我々が神を賛美するということなのです」[33] と、コレットは捉える。彼において、神を把握するということは、神を愛することに他ならなかった。また「肉である人間を霊的な存在へと形を変えていく、その直接的で根源的要因は、神ご自身の聖霊そのものです。それは、神ご自身の力によって形作るものであり、それ故、最終的には人間はそれを受け入れうる存在になるでありましょうし、また輪郭を整える神の自由な選びのままに (神の意志としてそれぞれに与えられるように)、人間は変わっていくのです。柔らかい蜜蝋を形付けるように、形を整え、鋳型を作る神の手が、人間を霊的、神的な形にさせる以外にはありえません。これこそが、御業なのです」[34]、或はまた「人間は、言わば、形づくられていない素材であって、霊的な形を欠いていますが、聖霊のように形作られるにふさわしい存在です。人間自体はその本性上神性を欠いているのです」[35] と述べ、人間に対する恩寵の働きを強調する。

しかし一方で「仮にある人が、聖霊と共にあるとしたら、それは神と一つになるということで

---

29 John B.Gleason, *op.cit.*, p.153.

30 *Ibid.*, p.152.

31 Ernest William Hunt, *Dean Colet and His Theology*, S・P・C・K, 1956, p.8.

32 エルンスト・カッシーラー、前掲書、p.33.

33 O'Kelly and Catherine A.L.Jarrott, *John Colet's Commentary on First Corinthians, A New Edition of the Latin Text, with Translation, Annotations, and Introduction*, Medieval& Renaissance Texts & Studies, Binghamton, 1985, p.256.

34 *Ibid.*, p.258.　本箇所の訳出にあたっては、東京学芸大学名誉教授 近藤恒一氏からの貴重な御指摘があった。ここに明記して感謝申し上げる。

35 *Ibid.*, p.258.

すし、その人は聖霊において実のある豊かさをもたらし、神と共に良き業の始まりであるということです。良き業とは、聖霊にのみ割り当てられるものではなく、聖霊における人間にも割り当てられるものなのです。そのような人間は、神に愛され、また神の愛に応える者であり、霊的に神と一体となる者なのです」[36]と言い、「私たちがキリストへと連なる愛は、私たちが育てることによって、永遠の花を咲かせ、永遠の実を付けるのです」[37]と述べるなど、人間自身の意志の働きが、神へと自らを高め、神との霊的合一を果たすことを可能にするとし、神の愛とそれに応答する人間の愛という、神の恩寵と人間の意志との相互関係を説く。彼の考えには、神からの降り注ぐ愛の中にあって、結局は人間自身の手に自らの生き方を委ねていたことが分かる。宇宙における人間の地位を固定しないコレットの人間観は、ピーコのそれに近い。ただしピーコにおいては「人間自身が自らの責任の担い手であり、彼には神を知るという終局目標に向かって、あらゆる制限を超えて進むことが必定であり、これこそが人間的と考えられ」[38]たのだが、コレットにあっては神を愛することが終局目標であり、神との愛ある関係性の中で信仰の花を咲かせ、地上においてキリストに倣うが如くその実を結ばせることが人間にのみ可能であるとされた。

神の国は、言葉にあるのではなく、神のような行動を起こすところにあるとするコレットは、「神の善、愛という聖霊を私たちが真似ることが出来るということは、惜しみのない施しをすることです」[39]とし、キリストの教えは、キリスト教的愛（caritas）という慈善の形で実践に移されるべきであることを強調する。「それ故、私たちは、神に愛されているように、互いに愛し合いましょう。そうしなければ、私たちは信仰から離れてしまうのです。愛をもって隣人のためになりましょう、そうしなければ、私たちは神の愛に背くことになるのです。私たちを通じて隣人を富ませるということは、私たち自身が豊かになるということなのです。あなたが隣人を最大限に愛している時、そしてあなたが神やキリストにおいて隣人の優れた点を探し出そうとしている時、あなたは自分自身を最大限に愛しているということであり、あなた自身を最大限に探求しているということであります」[40]と。このようにコレットにおいては、恩寵と同定とされた神の愛に応えて隣人愛を実践することこそが、日常に生きるあるべきキリスト者として神の義に適うものとされたのだった。こうした考えの根底には、愛の教説を説くフィチーノやディオニュシオス同様、愛は宇宙を統括するダイナミックな動きであるとする見方がある。

コレットは、「温かさと明るさ、これら二つの原理は共に最も高いところから最も低いところへと秩序よく発せられるのです。また下方に下っていくに従ってそうした明るさと温かさは失われていくものなのです。しかしながら、明るさと温かさが到達したところでは、可能な限りにお

---

[36] *Ibid.*, p.264.

[37] *Ibid.*, p.268.

[38] 根占献一『共和国のプラトン的世界』創文社、2005 年、p.172f.

[39] O'Kelly and Catherine A.L.Jarrott, *op.cit.*, p.266.

[40] *Ibid.*, p.271.

いてその効力は保たれるのです。その効力とは、明るさと温かさが内部にまで染み通り、多種多様なものが一つになった時に、閉じ込められ、保持されるものなのです。隣人という、言わば自分の近くにいる弱き者と一つになり続けるということは、高次にある者の絶え間ないケアということです。そしてそれはまた、高い所にある者の役目として、より下位にある者に対して気を配り、思いを尽くしてあげるということでもあり、そうしたことによって統一と命が保たれるのです」[41]と言う。彼は、一なる神より流出する愛のダイナミックな働きによって、霊魂は肉体を高潔な行為へと導くよう統治し、かくして人間は存在の位階における最高位へと帰還するものと捉えたのだった。

3. 聖パウロ学校の教育

コレットは父親からの遺産を聖パウロ学校の基金に充てる際、キリスト教的愛によって「時間的なもの (temporal things)」を「永遠的なもの (eternal things)」に変えることこそが、あるべき人間の義務である、と一般信徒に向けて述べている[42]。その彼が聖パウロ学校の子どもたちのために作成したカテキズムには、「どうか、この学校を日々発展させ、自ら学ぶことが出来るよう導き、教えたまえ。そして全き神の子であるイエス・キリストを通じて、あなたを私たちの中に通じさせたまえ。最も恵み深きイエスよ、あなたもまた、あなたの父、私たちの父と共に、あなたのすばらしい魂を、あなたの子どもたちの中に為させたまえ。またイエスよ、私たちをこの世において学び、真似させたまえ、やがて幸福の内に、あなたと共に一つになるでしょう」[43]とある。

オックスフォードでの聖書講義にみる解釈方法と、そこで示された理想的キリスト者像は、子どもたちが如何にして神の言葉を感受し如何なる人間となるかという、言わば聖パウロ学校での教育方法と教育目標に置き換えることが出来よう。俗人の団体が管理するこの学校では、キリストに倣い、神と一つになるための文法、修辞教育を通じて、現世で活動するロンドン市民の育成が目指されたのだった。以下、「聖パウロ学校学校規則 (*Statuta Paulinae Scholae*)」[44]を中心にコレットの求めた教育の在り方をみていく。

規則の一つに「校長」の関するものがある。ここで校長の適任者とは「正直で、徳があり、正しく純粋なラテン語及びギリシャ語の作品を学んだ人」、「仮にそのような人がいるのであれば、既婚者、未婚者、或いは管轄教区や礼拝などに関わる聖職を有さない者、或は自分の職務を学校教育のみに専念することの可能な聖職者でも構わない」とされている。子どもたちに直に接し教

---

41 John Colet, *Opera*, Vol.1,p.73f.

42 John Colet, *A ryght fruitfull monicion concernynge the order of a good christen mannes lyfe, very profitable for all maner of estates, and other, to beholde and loke uppon* in J.H.Lupton’s *Life of John Colet*, pp.305-310.

43 John Colet, *Cathecyzon*, in J.H.Lupton, *op.cit.*, p.290.

44 John Colet, *Statuta Paulinae Scholae*. in J.H.Lupton, *op.cit.*, pp.271-284.

育にあたるには、古典両語に精通し、且つ聖なる徳をも有する学識ある敬虔に裏打ちされた正に子ども達にとっての模範となる者が求められたことが分かる。加えて、従来のような学校寄進者のために祈りを捧げる司祭が空いた時間を利用して文法教育を施すのではなく、神に向かって人間性を開花させる、キリスト教的ヒューマニズムに立脚した言葉の教育に専念できる者とされた。この点、初代校長となったリリーとは、後に「リリー文典」として知られるロイヤル・グラマーを作成した著名な文法学者で、オックスフォード及びフィレンツェで学び、エルサレム巡礼の折、ロドス島でギリシャ人より直接ギリシャ語を習った初めてのイングランド人と言われ、また霊的に高みにある信仰篤い人物としてコレットから絶対的な信頼を得ていた人物だった[45]。

「子どもたち」に関する規定では、例えば「聖バルトロメオ討論大会」への参加が禁止されていた。これは、毎年聖バルトロメオ祭前夜 (8 月 23 日) に、文法学校の生徒が大勢聖バルトロメオ修道院の庭に集まり、交互に壇上に立って討論を交わすというもので、各文法学校では威信をかけてその大会に参加していた。しかし、コレットは、あらゆる事柄を知り尽くし、事を定義付けるためにあるような知識は、キリストの真なる教えに通ずることにはならないと捉え、参加を禁止した。エラスムスによれば「コレットは非常に学識のある人でありましたが、無駄なく勉強をするかのような、すなわち全ての知識と作品から学識の完璧さを探し求めるような、せせこましい、入念な賢さを良しとはしませんでした。彼は、そうすることは、人間の生来的な健康と心の純粋さと活力とを疲労させ、人間を不健康にさせ、キリストの様な純真さを真似ようとする本性、純潔さ、他人に対する率直な愛を減少させるものだとよく言っていました」[46]と。このことを裏付けるかのように、生徒の一人だったトマス・ラプセットもまた、コレットが議論や討論、研究に終始する言葉の教育を良しとせず、むしろ断食や瞑想を伴う読みを奨励していたと述べている[47]。

また「教育内容」に関する規定では、「私（コレット）は、この学校において、教師たちや学識ある者が何を教えるべきかと考えた時、私の頭の中に特別な計画や決意がよぎります。しかし、この私の意図を一般的な言い方で簡潔に言うならば、それは教師や学識ある者が、常にラテン語やギリシャ語の良い作品、知恵の伴った真のローマの雄弁さを備えた良い著述家を教えるべきである、ということです」とある。ここに示された良い著述家とは、「韻文体や散文体の汚れのない純粋なラテン語で、自分たちの賢い行いを書くキリスト者」とされ、そうした著述家を挙げる理由としては、「私の意図することが、この学校によって、子どもたちの中に神と、私たちの主であるイエス・キリストと、そして良きキリスト者としての生き方に対する知識と崇拝の念を富

45　コレットからリリーに宛てた書簡からもそのことがよく窺える。Cf., Foster Watson, *The English Grammar School to 1660*, Frank Cass, 1968, p.248f.

46　*CWE*, Vol.26, p.298.

47　コレットの愛弟子で聖パウロ学校の模範的生徒ラプセットの話は、エラスムスの『対話集』の中に出てくる。Cf. *CWE*, Vol.39, pp.88-108.

ませることにあるから」とされている。

　またコレットは、カリキュラムについても「私はまず子どもたちに英語でのカテキズム全てを学ばせ、（その次に）私が作ったラテン語の初級文法書を、或は子どもたちがより早く適切にラテン語が話せるのに、他に良いものがあるならばそのような文法書を、その後に、私の依頼によって学識あるエラスムスが書いた『キリスト者の手引』や同じくエラスムスの『言葉と内容の豊かさについて』を、それから真正なるラテン語を話すという目的のために最良と思われる、ラクタンティウス、プルデンティウス、プロバ、セドゥリウス、ユウェンクス、バプティスタ・マントゥアヌスといったキリスト者の著作を学ばせるつもりです」と記している。ここに挙げられた6人はいずれも、散文体で書かれた福音書を韻文体に表現し直したキリスト教的色彩の濃いた作品を残しており、コレットはそれらの宗教性はもとより、福音書に対する解釈上の方法論的手法、その優れた修辞的技法を子どもたちに学ばせたかったのである[48]。その故、必ずしも「古典作品」にはこだわっていなかった。彼が特に気に入り、教材として使用が唯一確認されているのが、同時代人マントゥアヌスの『無垢なる子どもたち (*Partheniae*)』である。マントゥアヌスは、生涯にわたる全作品において一貫してキリスト教の精神を書き著し、コレットから学校用の宗教詩を作成するよう依頼も受けていた。

　ところで学校用の教材として「古典」作品には必ずしもこだわっていなかったコレットであるが、その「宗教性」にはこだわっていた。彼はかつてオックスフォードの講義の中で、そうした「異教作品」に対し「キリストを見つけることのないこれらの本は、悪魔の目録でしかない」[49]と述べていたが、青少年の純真な心をくじく異教作品からの模範文の使用を警戒していた。自分たち大人の世代は悲惨の極みでしかなく、柔らかい革袋であり汚れを知らない幼い子どもの内に、再生された新しいキリストの精神を注ぎたいと切に願っていた。この「キリスト中心のヒューマニズム (Christocentric humanism)」[50]とも言うべき宗教的志向性の強いコレットの態度は、他のヒューマニストとは大きく異なる。コレットに依頼されて文法書を作成したリナカーのそれは、内容が高度すぎる点、異教的要素が強いという点で不採用とされた。或はまた修辞用の模範文としての異教作品の扱い方を巡って、それらを積極的に取り入れようとするエラスムスと意見を異にするなど、コレットの方がエラスムスよりも「異教の汚れ (pagan taint)」の脅威から教育を受ける者を守りたいという意志が強く働いていたのである[51]。ともすると肉的世界に落ちてしまう人間の弱さを知り、また一方で人間の自由なる意志に神への愛を託すコレットにとって、青少年にとって異教の作品は危険すぎると捉えられたのだった。それは、コレットがヘブライ的伝統の

---

[48] J.B.Trapp, *Erasmus,Colet and More:The Early Tudor Humanists and Their Books*, The British Library,1991, p.117.（以下、J.B.Trapp, *Erasmus,Colet and More* と略す）

[49] John Colet, *Opera*, Vol.2., p.110.

[50] Ernest William Hunt, *op.cit.*, p.12.

[51] J.B.Trapp, *Erasmus,Colet and More*, p.118.

上に身体と霊魂を切り離して考えることはせず、「身体のうちより優れた部位では天に、その最下等な部位では月下の世界に相似している」[52] とみなしていたこととも関連していよう。

またコレットは、「無学、分別のなさ、愚かさが、野蛮で、原文の改悪した、偽りのラテン語をこの世にもたらせました。同様に無学、分別のなさ、愚かさが、キケロ、サルスティウス、ウェルギリウス、テレンティウスが使っていた時代の古いラテン語語法や正当なローマの言語を歪め見下してしまったのです。それはまた、ヒエロニムス、アンブロシウス、アウグスティヌス、その他の多くの聖なる博士が、彼らの時代に学んでいたラテン語のことです」と述べるなど、時代を経て変容したラテン語そのものに対し強い不満感をも表していた。学校規則の最後は次のような教師への指示で終わっている。「それまでの無学の時代が持ち込んだ品のなさや口汚さは literature というより、むしろ bloterature と呼んでも構わないでありましょう。私は教師たちに対して、bloterature をこの学校から完全に排除し、そして善なるものを常に教え、子どもたちがきれいで汚れのない雄弁さと学識の備わったギリシャ語、ラテン語の作品を読めるように指導することを命じます」と。すなわち、美からかけ離れた言葉で綴られる作品 bloterature ではなく、研ぎすまされた感性を鈍らせない感化力のある言葉の作品 literature が学ばれるべきとしたのだった。

最後に聖パウロ学校の入学規約 [53] にもふれておく。これは、入学に際し教師から親に対して読み上げられる入学上の心得のようなものである。この中に「仮に、あなた方の子どもが道理をわきまえた年齢を過ぎても、学校で学ぶ意欲がなく、或は学習することが困難なことが判明したならば、これを理由に子どもがみだりに教室を使用することがないよう、あなた方は子どもの退学の警告を受けます」、「仮に、あなた方の子どもに学習する意欲があるならば、彼が十分に勉学を身に付くことが出来るまでこの学校で学び続けることに同意するべきであります」とある。聖パウロ学校で教育を受ける決定権は、他でもない子ども自身の手の内にあり、彼らの学ぼうとする意志が何よりも尊重されていたことが分かる。

このように聖パウロ学校の子どもたちは、神に向かって学びたいというその意志が尊重されながら、英語とラテン語によるカテキズムをもってキリスト教の基礎を学び、純正なる言葉による文法・修辞教育を受け、キリストの精神が流れる題材をもって霊的な読解力を身につけ、言葉に隠された神の愛を知り、イエス・キリストの生き方が実践できるよう教育されたのだった。

おわりに

以上、イギリス・ルネサンス初期の様相が窺えるコレットのヒューマニズムについて、彼の思想的特質と、それに基づく聖パウロ学校での教育を手がかりにしてみてきた。コレットは、フィ

[52] 根占献一「フィチーノ」(伊藤博明責任編集『哲学の歴史４』中央公論新社、2008 年(2007 年)、所収) p.188.

[53] J.H.Lupton, *op.cit.*, p.285.

レンツェ・ルネサンスの新思潮の下、パウロ書簡をそれまでのスコラ的方法論とは異なった態度をもって解釈にあたり、そこにフィチーノの介して知り得た神秘的傾向を有する新プラトン主義が認められるも、とりわけ聖パウロ学校で求められた教育の在り方を考察したことによって、他のヒューマニストとは異なる彼自身のヒューマニズムの精神について一層明らかにすることができた。

コレットが捉えた人間とは、その自由なる意志によって如何ようにもなりうる可能性をもち、また神の高みに近づくに相応しい存在として神に愛されているとされ、この点にこそ人間の尊厳性が見い出されたのである。また、この神の愛との応答関係にあって、キリスト教的愛を実践することが神の義に適う、あるべきキリスト者の姿として示され、よって子どもたちには、霊的人間になるべく､神を知ることではなく神を愛するための言葉の教育がなされたのだった。他方で、コレットは神を欲する傾向を有する人間観をもってしても、肉的世界へと下降する弱い存在であるという悲観的人間観をも持っていた。今だ不定で自己の定まるところの決定を委ねられている中にあって、人間の尊厳を失うことのない教育が求められたのである。しかして神へと向かう意志をくじき誘惑の道へと若者をいざなう異教的作品は聖パウロ学校の教育から排除され、且つ瞑想を伴った克己を旨とする厳格な信仰生活が子どもたちにも推奨された。他のヒューマニストとは異なってコレットのヒューマニズムには、宗教的志向性の強さと厳格なる禁欲的態度が認められ、このような点からみてもコレットはまさに「キリスト教的ヒューマニスト」であったと言える。